

内 容

巻頭言

第61回研究例会 案内

第59回、第60回研究例会 報告

巻頭言

続・私と「海外・帰国子女教育問題」について

土肥 豊 (帰国子女教育を考える会・事務局一員)

標記のようなタイトルにしたのは、以前、私はこの帰国子女教育を考える会「通信」(第15号)(2004年11月発行)「巻頭言」に「私と『海外・帰国子女教育問題』について」と題して執筆したことがあるが、今回はその続編のつもりであるからである。

私が「海外・帰国子女教育問題」に関わることになったのは、以前にも記したように、大阪教育大学の社会学関係の教員、元教員、学生、卒業生とで組織している大阪教育大学社会学研究会(会長 澤田軍治郎大阪教育大学名誉教授)有志による1988年8月のシンガポール日本人学校調査への参加に遡る。その後、アジアからオセアニア、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、中東と調査対象地域を移し、比較社会(や比較教育)の視点を入れ、また、日本人学校だけではなく、補習授業校や日系人学校も調査対象にして、継続的に海外帰国子女教育の現状と課題、「異文化理解」や「異文化体験」の意味等を探究してきた。

20年以上も継続してきたので、この際、今までの海外調査(の研究成果)の蓄積をまとめて出版物として刊行することを計画中である。そのために、以前訪問したところのいくつかを補充調査(再調査)し、20年前、10年前と比較検討することになり、2010年8月下旬には、1990年に訪問したことの台湾の日本人学校(台北日本人学校・台中日本人学校・高雄日本人学校)や台湾日本人会等を訪問した。今年(2011年)は、私たちの調査研究の出発点であったシンガポール日本人学校(日本語補習校を含む)やシンガポール日本人会等を訪問する予定である。

なお、昨年(2010年)の台湾補充調査の結果は、私が兼任講師をしている大阪総合保育大学紀要第5号(2011年3月刊行)に「台湾の日本人学校の現状と課題」として掲載されているので、詳細はそちらを参照していただきたいが、要旨のみを記すと以下のようなになる。

今回の私たちの補充調査の目的は、20年前(1990年)の私たちの台湾の日本人学校調査と比較して、台湾の日本人学校を取り巻く教育環境がどのように変化しているのかの現状と今後の課題を探究することであった。その結果として、特に国際結婚家庭児童生徒数(国際児)の比率が、台湾の各日本人学校とも著しく高くなっていることが明らかになった。そこから、次のような課題が浮き彫りになる。ひとつは、海外「日本人」学校の側面に関わることで、その「日本人」とは何かを再考すべきであるということである。もうひとつは、「海外」日本人学校の側面に関わることで、その「海外」の特性に応じて、「国際性」や「国際人」を育成するとはどういうことかも再考すべきであるということである。さらに、国籍問題では、台湾の微妙な立場が複雑に絡んでいる。

さて、「帰国子女教育を考える会」は、1990年に設立されてから、研究例会も60回を迎えた。私自身は、設立当初の初代川端会長時代は知らないが、2代目の坂田会長時代から研究例会に出席するようになり、特に4代目の小島会長時代からは事務局の一員としても関わるようになり、いろいろと学ばせていただきながら、今日に至っている。

「海外・帰国子女教育問題」は、今後とも日本の教育の「国際化」や変容に貢献する可能性を秘めていると思っているが、そのためには、「異文化」理解に関連する「外国人子女教育」、「留学生教育」、「特別支援教育」等との接点を模索する必要があるのかもしれない。